生命保険文化センター賞

笑顔の貯金

秋田県　秋田大学教育文化学部附属中学校　二学年

髙橋　蘭

私は、私が産まれたときの話を聞くのがとても好きです。母に「聞かせて」とねだると、「また？」と笑われるけれど、いつでも何度でもその奇跡を繰り返し聞いていたいのです。

それは妊娠五カ月目の妊婦健診のときのことでした。健診項目の一つである子宮ガンに母が罹患していることがわかったのです。医師に妊娠とガン治療を同時に行うことはできないと告げられた母は、一瞬も迷うことなく「どうか赤ちゃんを、この子をお願いします。」と即答し、妊娠の継続を最優先にお願いしたそうです。その赤ちゃんが私なのです。

医師や家族などたくさんの方の協力のもと私は無事に産まれました。しかし母は体の回復が必要だった為、本格的な治療が始まったのは産後半年以上も経過した頃でした。母はどんどん痩せ体力が落ちる中、検査、入院、通院、投薬、私の世話をしながら毎日を祈るように過ごしたそうです。健康になるために必要なことだと頭では分かっていても不安に心が押し潰され、将来や未来に希望が持てず諦めそうになったといいます。産まれたばかりの私に母乳をあげることも叶わず、暗い病室で小さな体を抱きしめ、「ごめんね。」と涙した夜は少なくなかったそうです。父は幼い姉の世話と家事、看病と付き添いで仕事を休まなければならない日が増えていきました。父はそのときのことを「たとえ仕事をクビになってしまったとしても家族が最優先だ。」と言います。「結婚したときに二人でそう約束したんだよ。」と。子どもが産まれ家族が増えたときに、幸せだけでなく病気や事故など予想できないリスクも増えるかもしれない。それでも皆が安心して支え合って暮らせるように。未来の家族の笑顔やその後出会うであろう姉と私を思い浮かべながら、若い両親は互いに生命保険を選び加入したそうです。そのときに加入した保険のおかげで、母は最適な手術と治療を受けることができ、治療に関わる費用の給付を受けて現在も通院を続けることができています。

私ははっとしました。病気やケガに見舞われたとき、重症なほどより先進的で高度な医療が必要です。治療が長期化するかもしれません。しかし就労が難しく収入が得られないなどで治療費の工面が困難な場合はどうしたら良いのでしょうか。本来、体の回復を一番に優先しなければならないのに、治療費や生活費など、金銭面の不安や心配が重なれば心身の負担は相当だと想像に難くありません。

治療を諦めてしまうかもしれません。そのことに気がつき改めて母の話を思い返すと、私が無事に産まれたことも、母が隣にいることも、家族が皆笑っていられることも、全て奇跡的だと感じます。生命保険に加入していたこともそうです。充分な治療を受け治癒に集中できる環境があったからこそ、母と私達は笑顔を繋ぐことができているのです。私達にとって生命保険とは、金銭面の保障だけでなく心強さと大きな安心を与えてくれ陰日向となって支え寄り添ってくれる家族の一員のような存在です。

「生命保険は笑顔の貯金、未来の幸せの積み立てだよ。」そう両親は言います。将来の進学や人生の選択肢が豊かで幸せであるようにと私は産まれてすぐに学資準備のための保険に加入しています。裕福でない我が家だからこそ備え支え合うという保険の理念や仕組みは、どこか笑顔の貯金に通じ、その貯金で積み上げたものが家族の幸せの歴史になるのだと思います。

今、私は若い両親が願った幸せな未来に笑顔で暮らしています。当たり前のようで当たり前ではない日常の奇跡。そのことに感謝しながら、私も大切な人の未来と笑顔を守りたいと強く願い、誓わずにはいられません。

私に話をしてくれた後、母は最後に必ず笑います。子宮ガンを患った幸運に感謝していると。「だって母娘二人で奇跡を体験したのよ。あなたという小さな可愛い命だけでなく、あなたと過ごすことができる幸せな未来を授けていただいたのだから。」と。